



ある程度の
資産になってきたら

運用方針が変わるとき

この話は、運用をスタートして数年経った後、あるいは、ある程度の資産になってきた時（目安としては500万円以上）、次のことが必要になってきます。理屈としては、リバランスを行いながら淡々と積立を行っていけば、これまで勉強してきた積立理論が生きて、それなりの複利効果が働いて、いわゆる**放ったらかしでも資産が殖える**というのですが、しかし、理論は理論であって、これが実務となると、理論通りには行かないことがおきてきます。これが書籍では、何とも表現できない限界となっている感覚的な部分。つまり、

顧客（生徒）の感情的な揺れが生じる タイミングが訪れる

というものです。理論上は、例えば平均利回り5%で30年間運用すれば、それでいいわけですが、しかし、額が大きくなると同じ10%の動きでも全く意味が異なってくるのです。特にマイナスの動きをした時は、体感として全然違います。

資産が50万円の時の-10%は、-5万円

5,000万円の時の-10%は、-500万円

これはもはや理屈うんぬんの世界ではありません。人の本能に響く話です。理論上では、このまま続けるのが正しい選択かもしれませんが、しかし、それはあくまでも書籍の中の話。実務的な話は、なかなかそうは行かないことが多いです。というか、ほとんど無理です。人は、やはり感情を持つ生き物です。そして、その感情に打ち勝って誰もができるのであれば、ここで悩まない訳です。書籍では、それでも理論を信じてそのままやりましょう！という流れですが、やはり、ここにこそ、FPの存在理由がまた生まれてくると織田は思うのです。人の感情を理論で崩すことは、やはり限界があります。ちゃんと向き合っていただきたいのです。

ヘッジをかける

そこで登場するのが、ヘッジ（保険）という考え方です。ポートフォリオの中に真逆の動きをする資産を一部組み入れることで、大暴落を回避させる方法のことです。例えば、**日経平均インバースというETF**がありますが、これは日経平均株価の真逆の動きをするもので、日経平均株価とインバースを1：1で保有すると、理論上は永久にプラスマイナスゼロの状態になります。（現実には、ぴったり真逆ではなく若干のズレがあるため微動します）こういった全く逆の動きをする商品を組み入れることで、世界中の株が大暴落する中でも、この日経インバースは大暴騰し、ある種の保険としての役割を果たしてくれます。いわゆるヘッジファンドは、こうしたカテゴリーのものを複雑なロジックで組み、相場が上がっても下がっても上昇することを目指すファンドのことで、**絶対収益型ファンド**と呼ばれています。つまり、ある程度、資産が大きくなってきたら、こうしたヘッジの性格のものを組み入れて、クッションを作る必要があるのです。もちろん、顧客（生徒）が暴落でも平気な性格なら問題ないのですが、しかし、リーマンショックのように株も債券も同時に暴落する事が起きると、2年経てば元に戻っているという理屈では分かっていながらも、なかなか書籍のようには継続し続けることが難しいと感じる時があるのです。そんな時は、このヘッジを採用します。

アクティブ資産運用

ただ、ここから先どうやって組んでいくのか？といった話になると投資アドバイスの色が強く、投資助言（フィナンシャルハーバー東京）の免許が必要になってきますので、アクティブ資産運用へのご案内してください。ここら辺のサービスの繋ぎ方については、個々のケースによりけりですので、その都度、メンバー同士で調整しながら、対応にあたってください。共同顧問する時のルールは、どちらがどういう比率で関わるか？によって、それぞれのパーセンテージが異なってきますので、ここは中島君に確認とってください。

ただ、個々のポートフォリオではなく、非常にシンプルなヘッジで良ければ、以前、織田が作った「織田の研究ファンド」がありますので、それを1つの例として参考解説してもらってもいいです。全体の3分の1をインバースにするという至ってシンプルなものですが、下落を10%以下に抑えつつも、20年間の平均利回りは8%以上になります。メンバーズページに資料をアップしておきます。